edited by dr. masato mugitani
vol.5-no.4

Asi Windが２０１９年１２月に "Penn & Teller: Fool US"で演じた カード・マジックの考察

麦谷眞里

（まえがき）半年前の"Penn & Teller: Fool Us"ですから、ご覧になった方もおられると思います。マジシャンは Asi Wind でした（写真751）。

写真751

Asi Wind は2019年4月の箱根クロース・アップにも来日したので、日本でも多くの方がその実演をご覧になったことと思います。私は、アメリカ合衆国で、彼のレクチャーにもワークショップ

にも参加したことがありますので、彼の演技スタイルというか嗜好は理解しているつもりです。この"Penn & Teller : Fool Us"の動画は、インターネットでも公開されていますから、現在でも観ることができると思います。ご覧になってない方のために、演技の前半部分だけを紹介します。後半部分は、タネ明かしをすると言ってもう一度観客をひっかけるサッカー・トリックの演出で、いわば「おまけ」で本質ではありませんので割愛します。ただし、この部分の「おまけ」も全体から見ると重要な要素になっているので、それは後述します。

1. [現象]

マジシャンは観客の１人に手伝ってもらいます。この客に、頭の中に52枚のデックを思い浮かべてもらい、その中から自由に1枚のカードを選んでもらいます。動画ではそれはクラブのキングでした。厳密には、客の選んだカードはスペードのキングでしたが、Asi Wind が変えてもいいと言ったら客がクラブのキングに変えたのです。ステージのテーブルの上には木製の箱が置いてあって、Asi Wind はその中からデックを取り出します。赤裏のバイスクルでした。デックの箱を開けて、裏向きに広げると、クラブのキングだけが表向きになっています（写真752）。

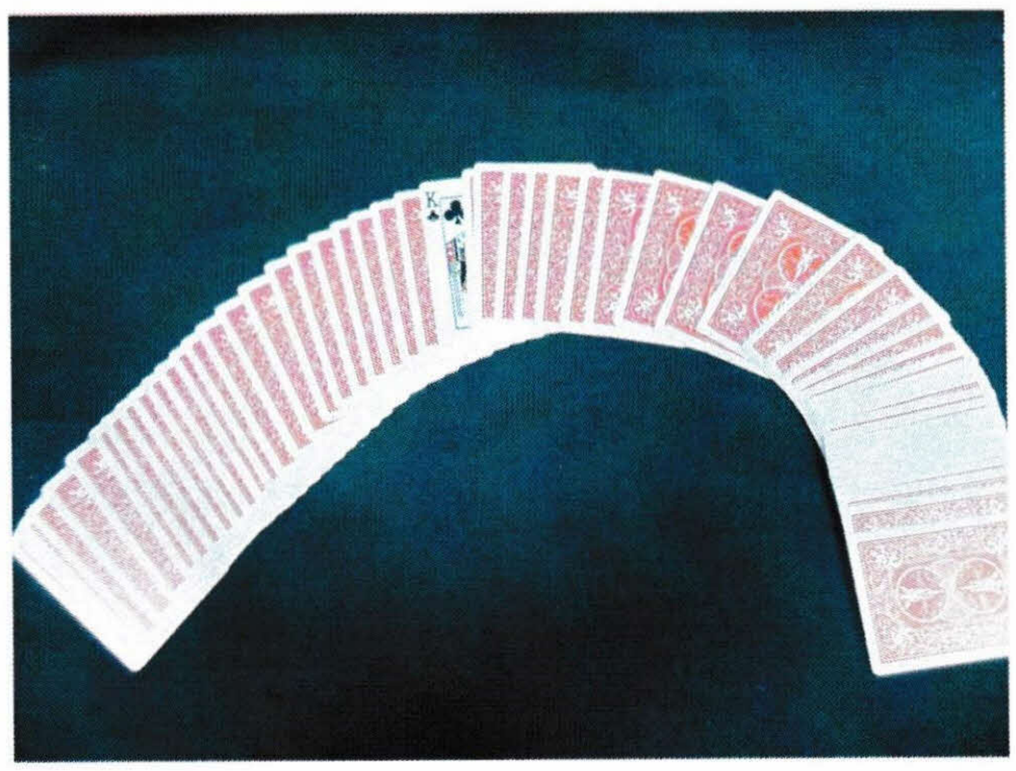

写真752

しかもそのカードだけが青裏なのです（写真753）。

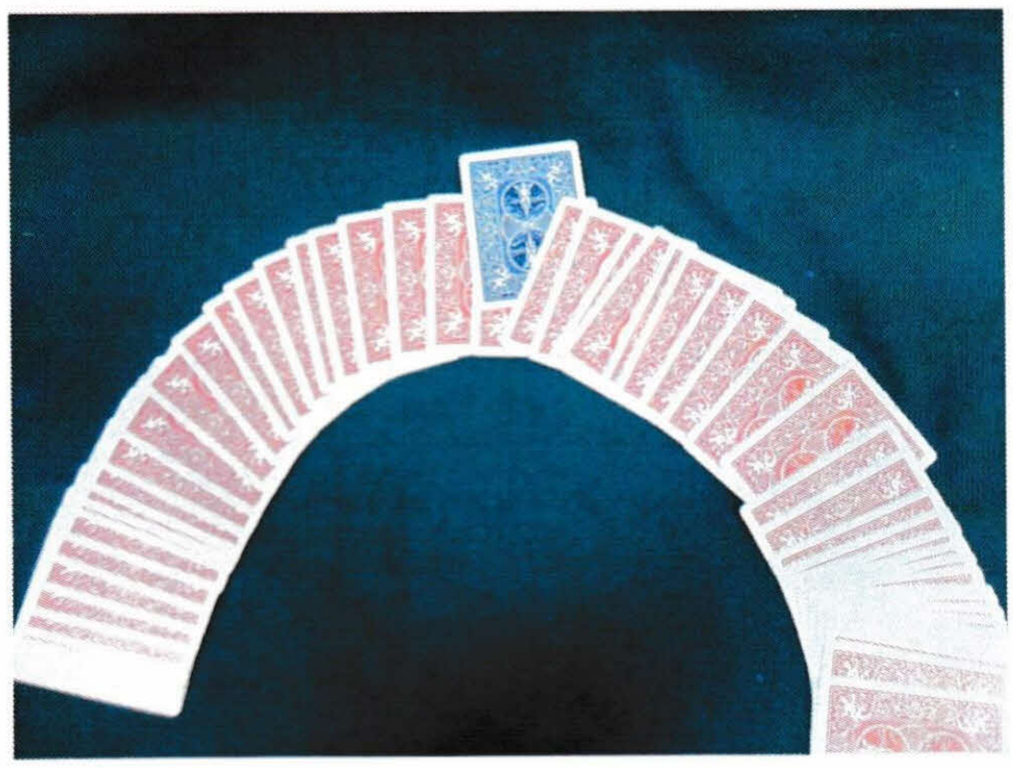

写真753

さらに、デックの残りのカードを表向きにすると、すべてブランク・カードです（写真754）。点検のために、すべてのカードを Penn & Teller に手渡しました。

写真754

以上が「手品」の前半です。後半は、その種明かしをすると言って、テーブルの下に52個のデックが用意してあることを説明しますが、最後には、そうでないことが証明されます。

2. 考察

なんだか現象だけを聞くと、Max Maven の"B'Wave"ではないかと思われたかもしれません。まだ半年前のステージですから、どこにも種明かしや解説はなされていません。したがって、以下の分析はあくまでも私（麦谷）の推理であって、こんなふうにやったらできるのではないかというひとつの案です。

まず、細部の演出部分を省いて、演技のエッセンスだけを箇条書きにします。

①観客を選ぶ。
②観客に52枚のデックをイメージで想像させる。
③観客に52枚のデックの中から具体的に１枚を選ばせる。
④テーブルの上の木製の箱からデックを取りだす。
⑤デックをカード・ケースから出して、裏向き（赤裏）に広げる。
⑥客の選んだカードだけが表向きになっている。
⑦客のカードをひっくり返すと客の選んだカードだけが青裏になっている。
⑧残りのカードの表はすべてブランクである。
⑨カードはすべて観客に手渡して点検させることができる。

この項目を見ると、カードの点検以外は、まさに"B'Wave"そのものです。

少し、倒叙的に逆に話を進めます。

⑨から検討します。最後に、デックをすべて観客に渡して改めさせることができたという事実です。デックを点検する動画の観客の代表は、この場合、Penn & Teller でしたが、彼らが協力しているとは思えませんので、客の選んだカードもブランクのデックもすべて演技の後で改めることが可

能だということです。それは、とりもなおさず、客の選んだカードがディバイディッド・インデックスであったり、インビジブル・デックの中の1枚であったりする可能性はないということです。つまり、客の選んだクラブのキングは、正真正銘の青裏のクラブのキングであり、残りの51枚（枚数はともかく）の赤裏のカードはすべて表がブランクのカードであるということです。

私は、最初に見たとき、これはてっきりデバイディッド・インデックスだと思いました。動画のカメラの視線は何度もマジシャン（Asi Wind）から外れますから厳密なことはわかりませんので、デバイディッド・カードを最後に1枚くらいスイッチして観客に渡す作業は造作もないことだと思ったのです。しかし、この考えはすぐに瓦解します。なぜなら、なにしろ点検のデックやカードを渡した相手は Penn & Teller ですから、そのようなスイッチが通用するはずもありません。さらに、もし、最後にスイッチできるのなら、予め客のカードがどこかに用意してあったということで、助手を使って運ばせるのならともかく、最初からそんなことができるのなら、そもそもカードをスイッチする必要がありません。

以上のことから、倒叙的にも、客が選んだカードそのものをデックの中で表向きにして出して来たことになります。

話を演繹的な順序に戻します。

①の観客の中から一人の客を選ぶことは、サクラだと思われないようにマジシャンがもっとも気を遣うことで、風船やフリスビーなどを投げて偶然にそれを受け取った人を選ぶなどの方法がとられていますが、今回は、客の選択を Penn Jillette に依頼して彼にまかせることによって、まったく任意に選ばれたことが証明されています。

②選ばれた客に52枚のデックをイメージで両手に拡げさせますが、これはとても重要なことです。イメージで、実際にデックを持っていないのに客の両手の間にあたかも持っているかのようにジェスチャーさせることによって、これからのカードの扱いが、完全に客の自由であるかのように観客全体に思わせることができるからです。実際はまったく自由ではなくなります。

③のカードの選択はマジシャンにとってはいわばこの手品の「核心」です。マジシャンは、このように言うのです。「拡げたトランプの中から数字のカードか絵札のカードかどちらかを抜きだして欲しいのですが、どっちがいいですか？」これは、絵札へのマジシャンズ・チョイスです。今回は客が絵札を選んだので、そのまゝ続けましたが、もし、客が数字のカードを選んだら、「数字のカードをすべて抜き出して捨ててしまってください。手元にはどんなカードが残っていますか？」と言えばいいのです。客は絵札と答えます。そして、絵札のうち何がいいか自由に選ばせます。絵札は全部で12枚ありますが、どれでもかまいません。最終的に選ばれたのはクラブのキングです。

④マジシャンは、ステージ上のテーブルの上に置いてある木製の箱を開けて、中から箱に入った赤裏のデックを取り出します。さて、どうして、赤裏のデックをそのままテーブルの上に置いておかないで、木製の箱に入れておいたのでしょうか？しかも木製の箱はかなり大きなものです。これが2番目の「核心」です。この中には、12枚の絵札をそれぞれ1枚だけ表向きに入れた12個のデックが収められています。ただし、たとえば、黒のジャックとクイーンとキングは青裏で赤裏のブランク・デックに収められており、赤のジャックとクイーンとキングは赤裏で青裏のブランク・

デックに収められているように赤デックと青デックとが別々になるように並べられており、さらに、それぞれを標識できるように目印が付いています。したがって、黒のクラブのキングが選ばれたら、青裏のキングが表向きに入っている赤裏のブランク・デックを木製の箱から取り出します。

以上は、もっとも単純な推理です。ディバイディッド・インデックスを使っていたら、準備するデックの数は半減します。その具体的なやり方は後述します。観客にデックやカードを点検させないのならそれで十分です。Asi Wind が使っていた木製の箱はかなり大きいので、デックは12個収納できると思いますが、6個ならもっと簡単です。しかし、このステージでは、ディバイディッド・インデックスは使っていませんでした。

もうひとつ、用意するデックの数を減らす方法は、たとえば、ひとつのデックに2枚ずつ絵札を用意してデックのトップに置いておいて、選ばれなかったほうの絵札をカード・ケースに残して来てしまい、ケースから取り出したデックを両手の間に裏向きで拡げるときに cull でデックの中央に押しこむことです。Asi Wind はデックをケースから取りだすとき、なぜか不自然に慎重に取り出していましたから、この可能性は否定できません。この場合も準備するデックは6個で済みます。仮に絵札をひとつのデックに3枚ずつセットしておけば、ケースから取り出すときの技術に工夫は必要ですが、準備するデックの数は4つに減ります。

いずれにしても、木製の箱の中に複数個のデックが準備してあったことは疑いがありません。

3.「手品」の後半部分

［現象］の項では割愛しましたが、ステージの後半部分では、「タネ明かし」をすると言って、まず、木製の箱を透明なアクリルの箱に変えます。説明では、このアクリルの箱の底がなくて、テーブルの下に用意された52組のデックから、客の選んだカードがセットされた該当のデックだけをあたかもアクリルの箱の中にあったかのように取り出すのだ、と説明されます。つまりアクリルの箱の中にはあくまでもデックが一個しかないという傍証です。52組のデックはテーブルの下に円型に並べてセットされていて、それをテーブル上のコーヒー・カップを回転させてベルトでデックの円盤をコントロールする仕組みが面白おかしく説明されます。観客は、そのメカニズムに溜息をつきますが、これは幻想で、実際は、52組の円型のデックの写真が薄い一枚の円盤として置かれているだけで、実際にはデックは一組もありません。そのことは最後に暴露されて、観客は二度溜息をつくのです。Asi Wind は、Tommy Wonder のことが大好きだと言っていましたから、実際には使っていなくても、こういうメカニズムの構造は、まさに Tommy Wonder を彷彿とさせます。

さて、これは穿った見方をすると、前半の手品部分の補強であったような気がします。つまり、本来なら、これほどの準備をしなければならない手品だったというわけです。ただ、余計だったのは木製の箱とほぼ同じ大きさの透明なアクリルの箱を用意したことです。マジシャンはこのアクリルの箱の蓋を開けて、テーブル下にセットされた一連のデックの列を見せますが、あきらかにアクリルの箱は大きくて、デックが最低でも6組、きちんと揃えて入れれば、12組は収納できるスペースがありそうでした。

4. 私の結論

以上の私の推理はちょっとエレガントじゃないので、実際のタネはもっと洗練されたものかもしれません。しかし、たった一つのデックを大きな木製の箱に入れて置く理由はありませんので、木製の箱の中に用意されたデックの数に違いはあっても、この推理は当たらずしも遠からずではないかと思っています。私の案を整理すると次のようになります。

①客には絵札をフォースする。

②12枚の絵札に対応するデックを木製の箱に準備しておく。

③客の選んだカードがセットされたデックだけを木製の箱から取り出す。

5. masquerade 的やり方

この種の手品で、最後に、すべてのカードやデックを観客に手渡して改めさせる手順はほとんどありませんので、前述のディバイディッド・インデックスを使うことにします。そうすれば、準備するデックは6個になります。さらにディバイディッド・カードをダブル・フェイスにすると、準備するデックの数は3個に減りますが、ハンドリングがやや煩雑になりますし、やはり、選ばれたカードの裏を見せたいので、今回は採用しませんでした。

[現象]は、Asi Wind が演じたものとまったく同じです。

[準備するもの]

①絵札のディバイディッド・インデックス：青裏の♣と♠のジャック、赤裏の◇と♡のジャック、青裏の♣と♠のクイーン、赤裏の◇と♡のクイーン、青裏の♣と♠のキング、赤裏の◇と♡のキングの6種類（写真755：裏の色がわかりやすいようにしてある）。これらのギャフ・カードは奇術材料店（ディーラー）で簡単に購入できます。青裏は黒の絵札、赤裏は赤の絵札と覚えやすいようにしてありますが、それは便宜のためで、特に裏の色には拘泥する必要はありません。

写真755

②赤裏のブランク・デックを3組

青裏のブランク・デックを3組（写真756）

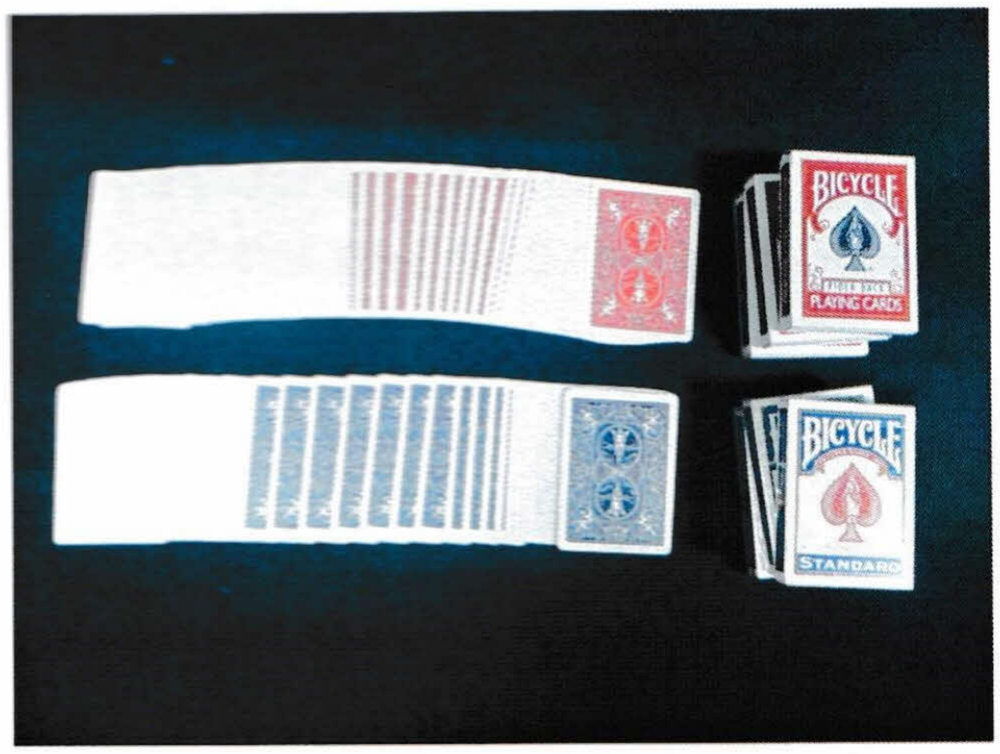

写真756

③デックが6組程度入る箱（材質は問いません）　1箱

［セット］

①まず、青裏のディバイディッド・インデックスの絵札（黒）をそれぞれ赤裏のブランク・デックの中に1枚だけ表向きにして入れます。カード・ケースを開けるときのフラップに近いほう（上）を♣にしておきます。これは必須ではありませんが、どっちがどのスートだったかはカード・ケースの外からわかるようにしておきます。次いで、赤裏のディバイディッド・インデックスの絵札（赤）をそれぞれ青裏のブランク・デックの中に1枚だけ表向きにして入れます。今度も、ケースの入口（上）に近いほうを◇にしておきます。これも、特に◇である必要はなく、どっちがどのスートだったか、ケースの外からわかるようにしてあればけっこうです（写真757は一部のセットだけ）。

写真757

②このように準備した6組のデックを、取り上げるときに間違わないように、赤青別々にして用意した箱の中に並べますが、どのデックに目的のディバイディッド・インデックスが入っているか一目でわかるように、タグを付けておきます（写真758）。本来、この箱の中にはデックが一組しか入っていない想定ですので、マジシャンは箱を開けたら、すぐに取り出せなければ不自然

です。そのことを考えても、練習のときに、予め、箱の中の各デック(各ディバイディッド・インデックス)の位置を箱の外からも見当をつけることができるようにしておくことが肝要です。また、右手で箱の蓋を開け、左手でデックを取り出すようにして、箱の蝶番が観客側を向くようにしておけば、左手でデックを取り上げるときの一瞬の指先の選択の動きが、観客から見えなくて取り出す時間を稼げます。実際、Asi Wind もそのようにしてデックを取り出しています。

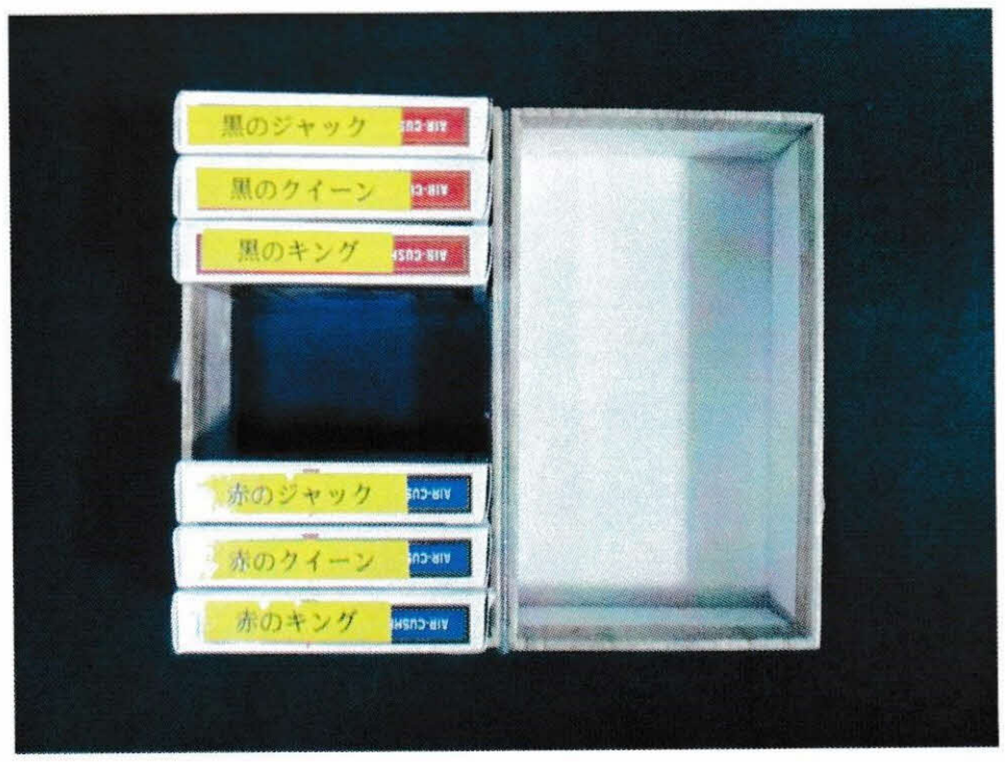

写真758

[やり方]

①6つのデックの入った箱をテーブルの上に置きます。観客の中から一人を選び、その場所で立ってもらいます。「ちょっと想像力が必要です。トランプをこのように、自分に表を向けて持っていることをイメージしてください。と言いながら、マジシャンは実際にも自分でデックを持って拡げているような素振りを行ないます(写真759)。客が同じ動作を行なうことを確認します。

写真759

②「トランプが何枚あるかご存知ですか？」客が何と答えようとも、「このトランプは、ジョーカーを除いてありますから、全部で52枚あります。すでによく切ってありますから、もう混ぜる必要はありません」

③「それでは、トランプには1から10までの数字のカードとクイーンやキングのように絵札のカー

ドとがありますが、どっちかお好きなほうを取り出すことにします。どっちがいいですか？」と訊きながら、左手でファンに開いたデックを持って、右手でカードを抜きとるような動作をします（写真760）。

写真760

④客が、「絵札」と言ったら、「わかりました。それでは絵札だけを抜きだしたことにします」と言います。客が、「数字のカード」と言ったら、「それでは数字のカードをすべて抜きだして脇へ除けてください。手にはどんなカードが残りましたか？」と訊きます。もちろん、「絵札」です。こうして、マジシャンズ・チョイスで客に絵札を選ばせます。

⑤「お手元にある絵札はジャックとクイーンとキングです。それぞれ、ダイヤとハートとクラブとスペードがありますが、1枚だけ選んでください」ここでは客がダイヤのジャックと言ったとします。「ダイヤのジャックですか？珍しいですね。普通はスペードのキングとかハートのクイーンを選ぶものなのですが・・・もう一度良く考えてください」と客に再考を促します。もちろん、すべての絵札が用意してありますので、これはあくまでも演出です。

⑥「ダイヤのジャックでよろしいですか？いまならまだ変えてもいいのですよ？」と念を押します。客が、ダイヤのジャックでいいと言ったら、「わかりました」と言って、テーブルに向かいます。ダイヤのジャックのディバイディッド・インデックスは赤裏で、青裏のデックの中に入っています。

⑦マジシャンは、右手でテーブルの上の箱の蓋を開け、赤（◇と♡）のジャックのディバイディッド・インデックスの入っている青裏のデックのカード・ケースを左手で取り上げます（写真761）。ただちに、箱の蓋を閉めます。

⑧「このトランプは、誰の目にも手にも触れないように、このテーブルの箱の中に、ずっとしまってありました。」（「誰の目にも」という表現で、カード・ケースが箱の中に入れてあった意味をここで強調しておくのです）。青裏のカード・ケースを観客に示します。「もう一度確認しますが、あなたが選んだカードはダイヤのジャックでしたね？」こう言いながら、カード・ケースのフラップを開けてデックを取り出します。いま、客の選んだカードはダイヤのジャックでしたから、そのままフラップに近かったほうを上にしてデックを持ちます。もうカード・ケースは使いませんのでテーブルの上に置くか、マジシャンのポケットにでも入れます。

写真761

⑨デックを裏（青裏）が観客のほうを向くようにして両手で拡げます。「ご覧ください。ほとんどすべてのトランプは裏向きなのですが、たった一枚だけ表向きのトランプがあります」と言いながら、一枚だけ表向きになっているダイヤのジャックのインデックスを見せます（写真762はテーブル上で撮影したもの。実際は両手に持っている。以下同じ）。客は驚きます。

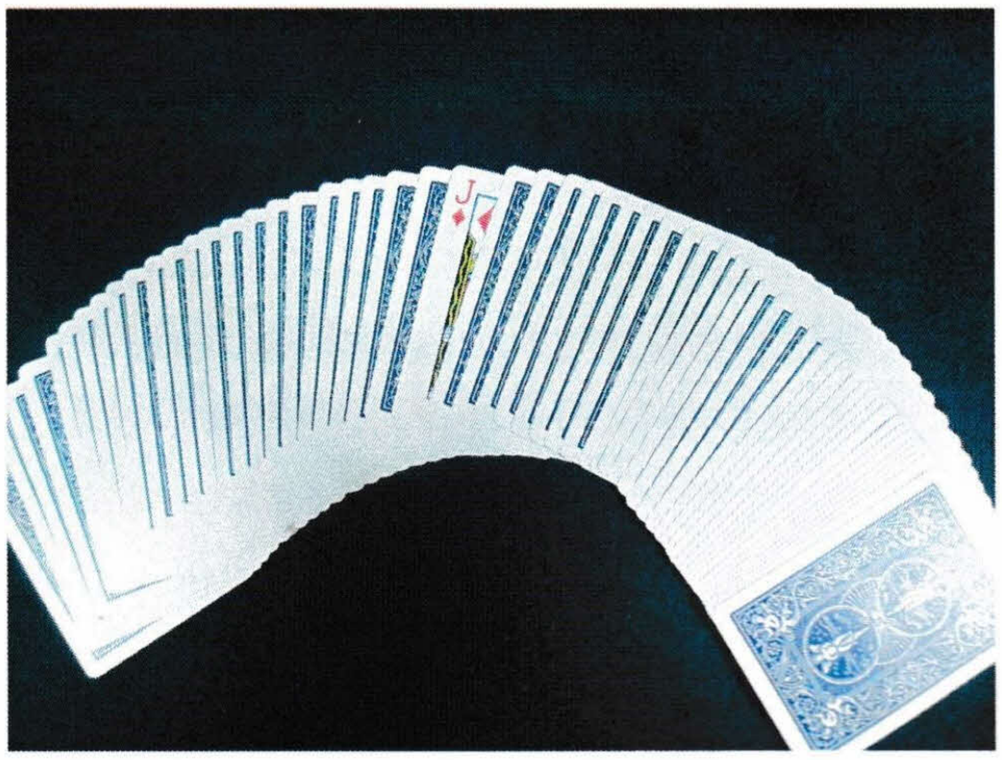

写真762

⑩「それだけではありません。私は、あなたがこのダイヤのジャックを選ぶのをずっと前に知っていたのです。それが証拠に、このダイヤのジャックだけが裏の色が違うのです」と言って、右手でダイヤのジャックだけを抜きだして裏が赤裏であることを見せます（写真763）。客が再び驚いている間に、ダイヤのジャックを持ち換えて、ハートのインデックスの部分を右手に指先で覆って隠し、再び観客に表を見せます。見せたら、ダイヤのジャックをポケットにでもしまいます。

⑪「さらに、ほかのトランプはすべて真っ白なのです！」と言いながら、手に持っているデックを表向きにして広げながら観客に見せます（写真764）。観客は三度驚くのです。

⑫最後に、デックとポケットに入れたダイヤのジャックを一緒にしてカード・ケースに戻し、それをテーブルに置いてある箱の蓋を開けて無造作に戻します。この箱を持って帰るときはくれぐれも重たそうに持たないでください。箱の中には一組のデックしか入っていない想定ですから。

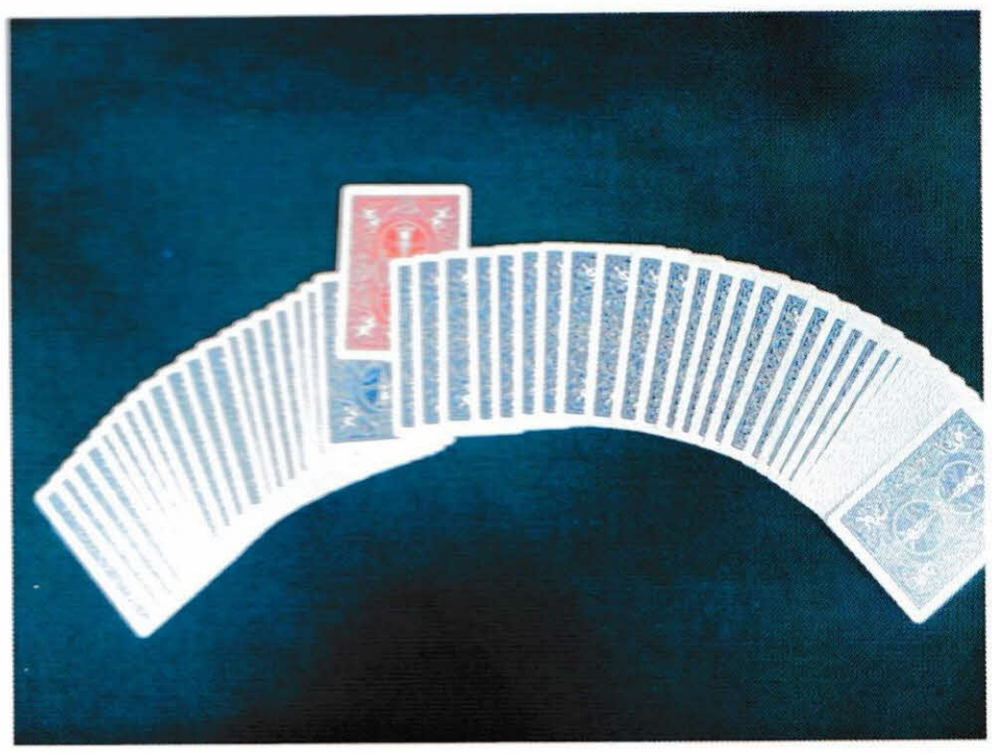

写真763

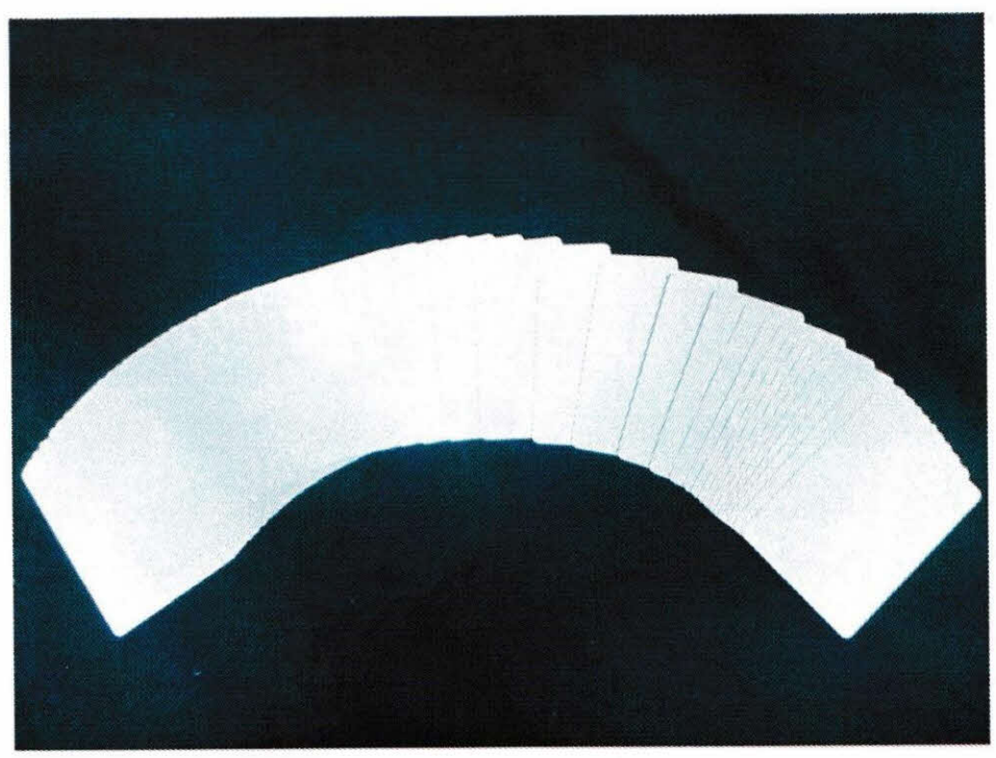

写真764

6. [コメント]

私の推理には異論のある方もいらっしゃると思います。特に、木製の箱の中に12個ものデックを用意しておくのは馬鹿げています。Asi Wind は Cull が上手ですから、やはり何枚かの絵札をデックのトップに用意しておいて、その中から当該の絵札だけを何らかの方法でデックとともにケースから取り出して、それを Cull で真ん中に持ってくるのが自然です。選ばれなかった絵札はカード・ケースの中に残しておくのです。あるいは、カード・ケースに仕掛けがあるかもしれません。そうでなければ、ケースからデックを取り出すのにあんなに慎重にはならないはずです。後半部分にあれだけの準備をしたのですから、カード・ケースに細工をするのは造作もないことです。

さて、ディバイディッド・インデックスの絵札を奇術材料店に注文されるとき、日本のディーラーなら、インデックスが上下異なるカードとでも言えばわかってくれますが、欧米の奇術材料店に注文するときは、なんと言えばいいのか困惑されると思います。意外なことですが、*"divided card"* や"divided index"と言ってもわかってくれないことがあります。幸い、絵札だけがセットになっていて、"MISINDEXED GAFF SET"という商品がありますのでお問い合わせください。

Asi Windの名作"double exposure"を上手に演じられない方のために

麦谷眞里

(まえがき)タイトルにある通りです。"double exposure"を上手に苦もなく演じられる方は読み飛ばしていただいたかまいません。これは、すでに"double exposure"を練習してみて、上手くいかなかったり、壁にぶつかったりした方のために書いていますから、"double exposure"というカード・マジックをまったく知らない人には手品の解説にはなっていませんのでご注意願います。

[やり方]

①まず、客にデックをシャッフルさせます。Asi Wind はさせなくてもいいと言っていますが、現象が強烈なだけにギャフ・カードを使っているのではないかと思われますので、私はシャッフルさせたほうがいいと思います。

②客にカードを引かせて客が覚えている間にマジシャンは客に背中を向けて、デックのボトムから4分の1くらいのカード群を表向きにします。オリジナルでは、トップから13枚のカードを数え取って表向きにしてボトムに加えるとありますが、枚数を数える必要もトップから取る必要もありません。解説の便宜上、客の選んだカードをハートの7としておきます。

③身体を向き直り、「今日は、トランプの表と裏をバラバラに混ぜてしまいます。そのほうがあなたのカードを探しにくくなります」と言って、左手にデックを持ち、右手で上半分を取って表向きにして、フェロー・シャッフルします(写真765)。パーフェクト・フェロー・シャッフルである必要はありません。少しぐらいラフでも大丈夫です。

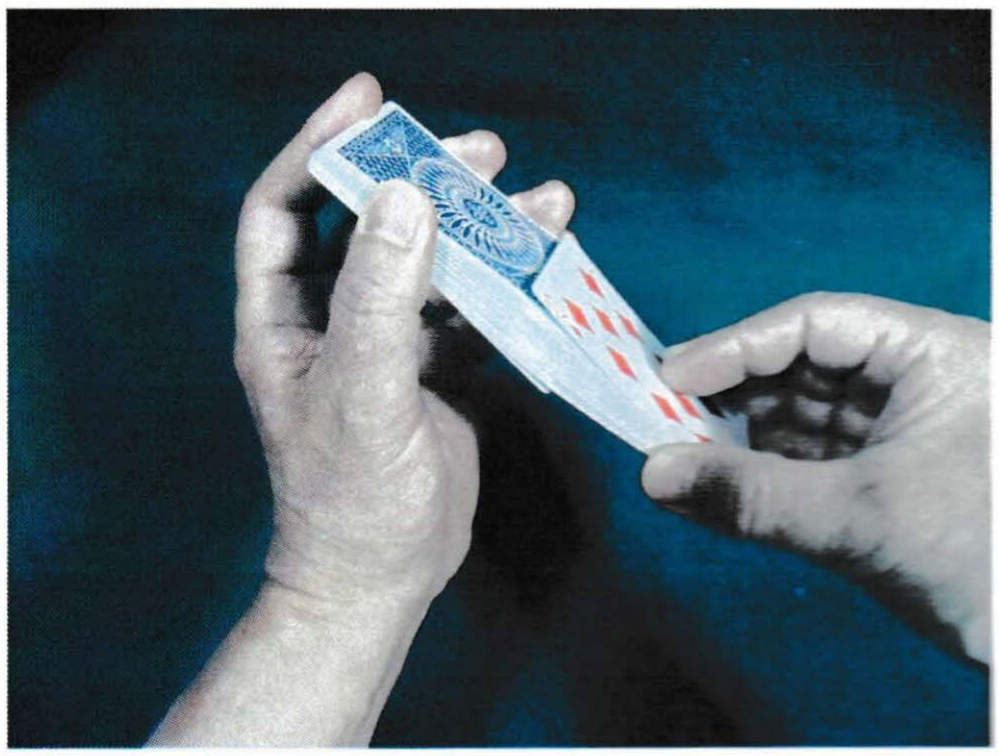

写真765

④フェロー・シャッフルが終わったら、そのままデック(の上半分だけ)を広げると確かに表と裏が混ざっています。

⑤デックを一旦閉じて、客のカードを裏向きのまま受け取り、このカードを裏向きのままでデッ

クの下半分に返します。「これであなたのカードはどこに行ったかわからなくなりました」と言いながら再びデックを広げ、上半分の表裏が混ざっている最後の裏向きのカードの上にブレイクを作りつつデックを閉じます。客のカードがそのさらに下に裏向きになっていますので間違えないように注意します。

⑥ブレイクから上のカード群を右手で取って、これを左手の下半分にフェロー・シャッフルで入れます。今度もパーフェクト・フェロー・シャッフルである必要はありません。ただし、完全に入れてしまわないで、4分の1くらい入ったところで止めます（写真766）。

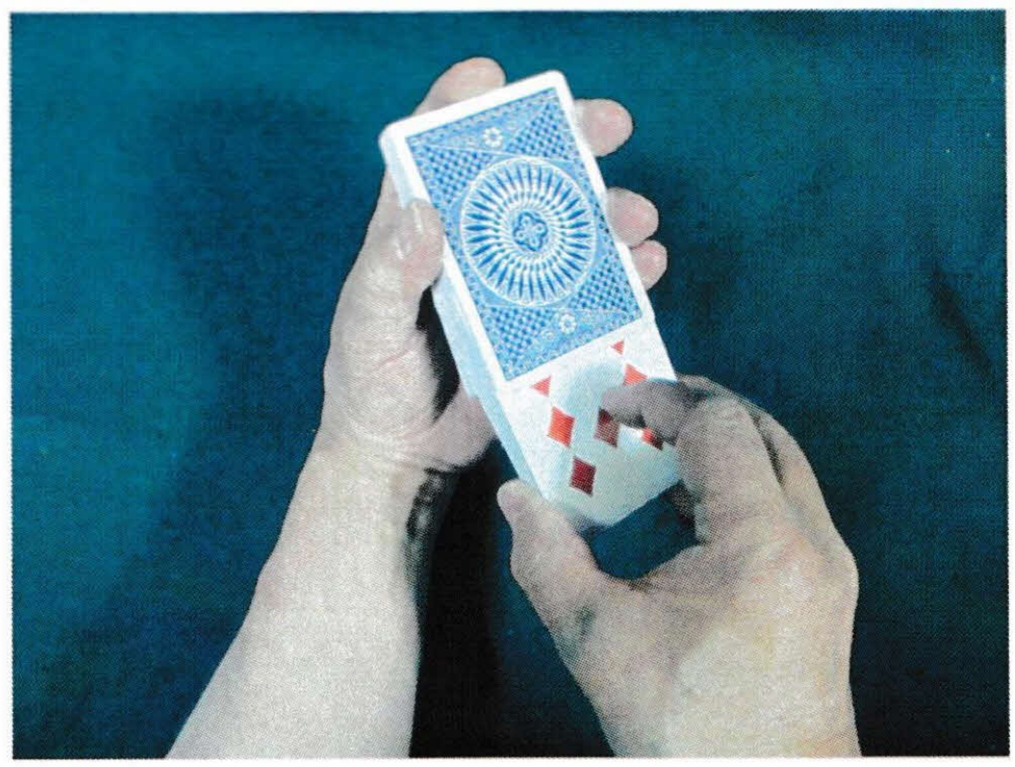

写真766

⑦このままデック全体を横向きに左手の上でひっくり返します。次いで、右手を上からかけて、上に突き出たカード群を中に入れようとしますが、このとき、右手の中指・薬指だけに力を入れて、カード群が斜めに入って行くようにします（写真767）。実は、これが上手にできて、なおかつ右手小指で入って行くカード群の右上隅を右へ回転させてサイド・ジョグできれば、オリジナルとまったく同じになります。

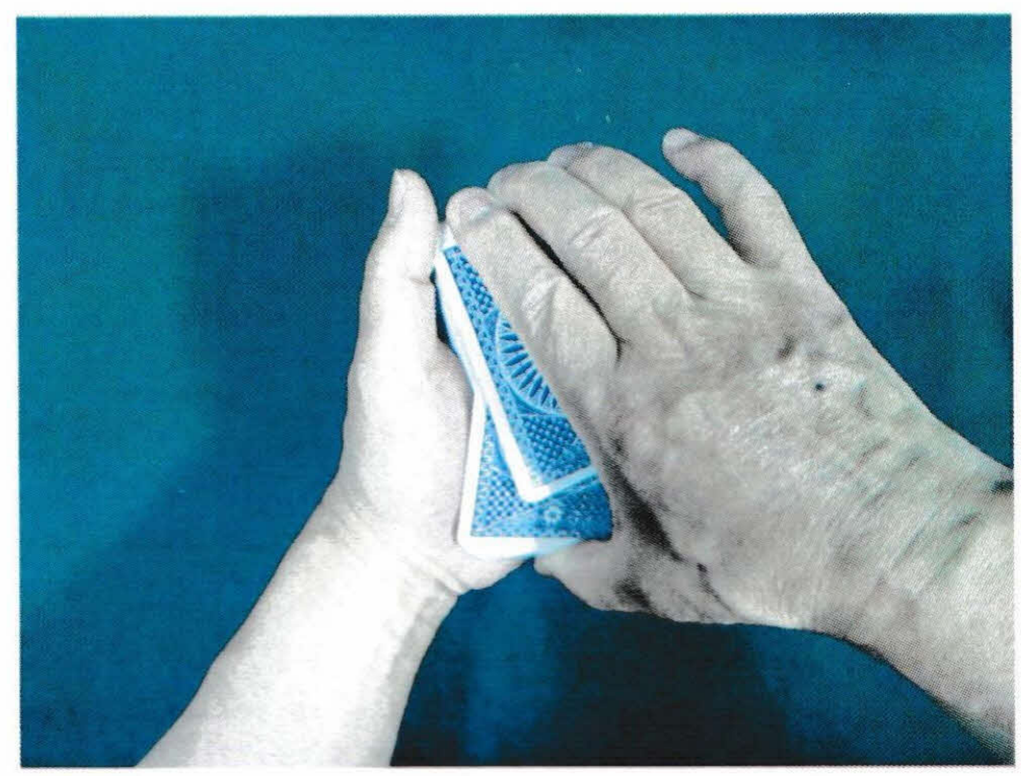

写真767

⑧オリジナルのようにサイド・ジョグできなかった場合でも、押しこんだカード群が斜めに入ったままでいいですから、デックを立てながら反対側が客のほうを向くようにしてファンにします。プレ

ッシャー・ファンではありません。ややラフにファンにするのです。すると、客側からは表と裏とが混ざったデックに見えますが、マジシャンからは、客のカードだけが表向きになっているトライアンフ現象のファンに見えます。もし、客のカード以外にも表向きになっているカードがあったら指先でカードを移動させて見えないように修正します（写真768）。

写真768

⑨客に自分の iPhone（スマート・フォン）を取り出して、カメラをオンにしてもらいます。フラッシュはオフです。右手で客からカメラを受け取りながら、左手のファンを客にそのまま両手で持ってくれるように言います。客からはマジシャン側の面が見えないように注意します。そのまま客とファンに開いたデックの写真を撮ります（写真769）

写真769

⑩iPhone を客に返し、デックを受け取ってファンを閉じてしまいます。

これは、aficionado の Vol.5-No.4 です。
郵便の送付先：〒145－0061　東京都大田区石川町2－33－1－904　マスカレイド
E メール・アドレス：masqpart4@aol.com
これは、限定100部のうちの08／100です。　（2020年6月）